

次世代と紡ぐ 福島未来

～福島と東京圏の高校生約1000名を対象としたアンケート調査から見たこと～

福島未来＝次世代

福島未来を担う“次世代”は、震災・原発事故、復興課題についてどの程度知っているのか

環境省は2024年度を「戦略目標年度」とし、除去土壌の県外最終処分についての全国的な理解醸成の実現を目指し、様々な施策を行ってきた。

そんな環境省が掲げる今年度の目標の一つとして、以下のようなものがある。

2024年度の理解醸成の取り組みにあたっての基本的な考え方③

○理解醸成の対象として重要な者である、次世代・自治体やメディア等に対する施策を中心に行っていく

中間貯蔵除去土壌等の減容・再生利用技術開発戦略検討会 コミュニケーション推進チーム第9回の配布資料を参照

除去土壌の県外最終処分は2045年3月が最終期限であり、その時中心となるのは“次世代”である。
しかし、震災から今年で13年が経過し、**震災記憶の薄い・ない“次世代”**が増えてきている。

「福島未来を担っていく“次世代”は、震災・原発事故及び復興課題をどの程度理解しているのか。」

その問いを明らかにすべく、東京大学大学院情報学環の開沼研究室と共同で、アンケート調査を行った。

調査について

調査概要

＜目的＞ 高校生の震災・原発事故及び復興課題への認知度の把握、福島の実態把握、認知度の地域差の比較

＜対象＞：東京圏の高校に通う生徒642名（計8校）
福島県の高校に通う生徒271名（計5校）

＜調査期間＞：2023年12月18日から2024年3月11日

＜調査手法＞：WEBフォームを用いたアンケート調査

※各校教員に調査を依頼し、オンライン情報共有ツールから回答を得た

＜調査項目＞

①属性（性別、年齢、学年、居住地他）、②震災・原発事故及びそれらに関連する事柄、③放射線に関する基礎知識、④除去土壌の県外最終処分・再生利用の認知度とそれらの情報源、⑤福島の食・旅行に対する認識

この調査では、震災当時乳幼児で、当時の直接的記憶の薄い・ない世代である高校生を“次世代”と定義し、それらに対しWEBフォームを用いたアンケート調査を行って、震災・原発事故に関連する事柄や除去土壌についての認知度を調査した。

対象は、**東京圏**（再生利用実証事業予定地）の高校に通う生徒と**福島県**（中間貯蔵施設）の高校に通う生徒で、計13校913名から回答を得た。

除去土壌の県外最終処分について「知っていた」約3割

除去土壌の県外最終処分について「知っていた」（「内容をよく知っていた」+「聞いたことがあり、内容も少し知っていた」と答えたのは、**全体の31.2%**だった（図1）。また、地域別の認知度は**東京圏で31.4%、福島県で28.5%**であった。

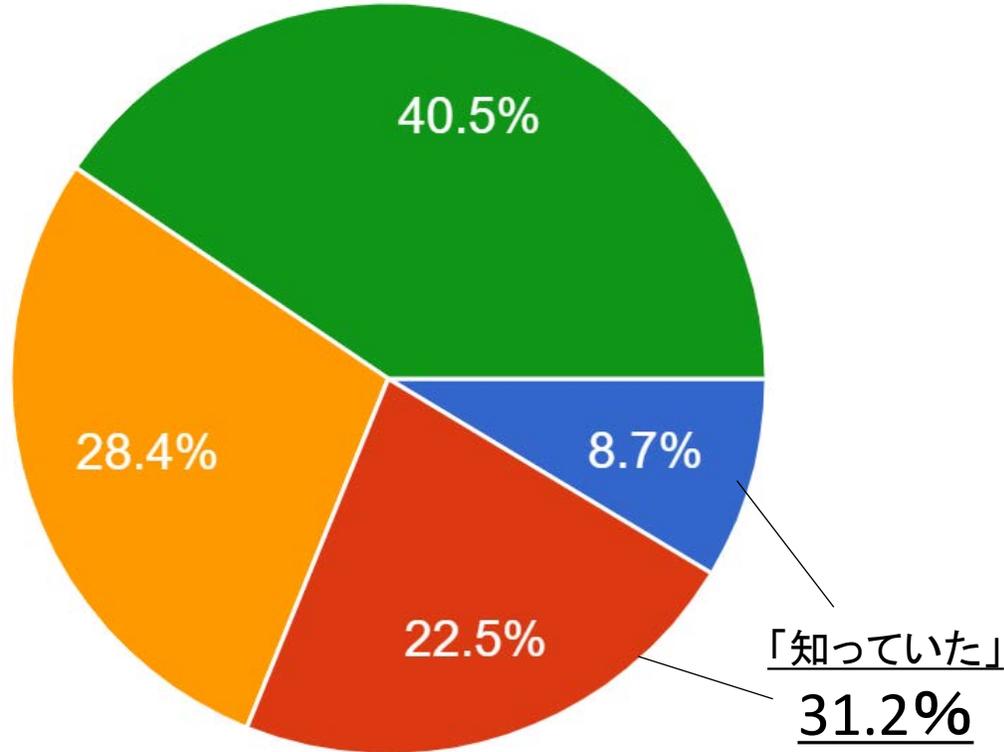


図1：除去土壌の県外最終処分についての認知度

- 聞いたことはあるが、内容は知らない
- 内容をよく知っていた
- 聞いたことがなかった
- 聞いたことがあり、内容も少し知っていた

表1：除去土壌の県外最終処分に関する地域別の認知度

	福島県	関東地方*1
成人*2	54.8%	25.5%
高校生	28.5%	31.4%

*1：東京圏を含む

*2：環境省 令和5年度WEBアンケートから作成

環境省の成人を対象とした調査では、県内外で認知度に2倍以上の差があるにもかかわらず、**高校生においてはその差はほとんど見られない**。また、福島県内においては、成人と高校生の認知度に**大きな差が見られた**。

→**震災記憶のある世代とない世代の間で、認知度に世代間格差が生じている**

除染作業の方法 約7割が誤答

福島県内の放射線物質の除染作業について、正答である「表土をはぎ取る」を選択した割合は、**全体で約3割**だった(図2)。また、福島と東京圏で正答率を比較したところ、**福島では約45.4%、東京圏は27.4%となり、福島の正答率が東京圏を上回った**(図3)。

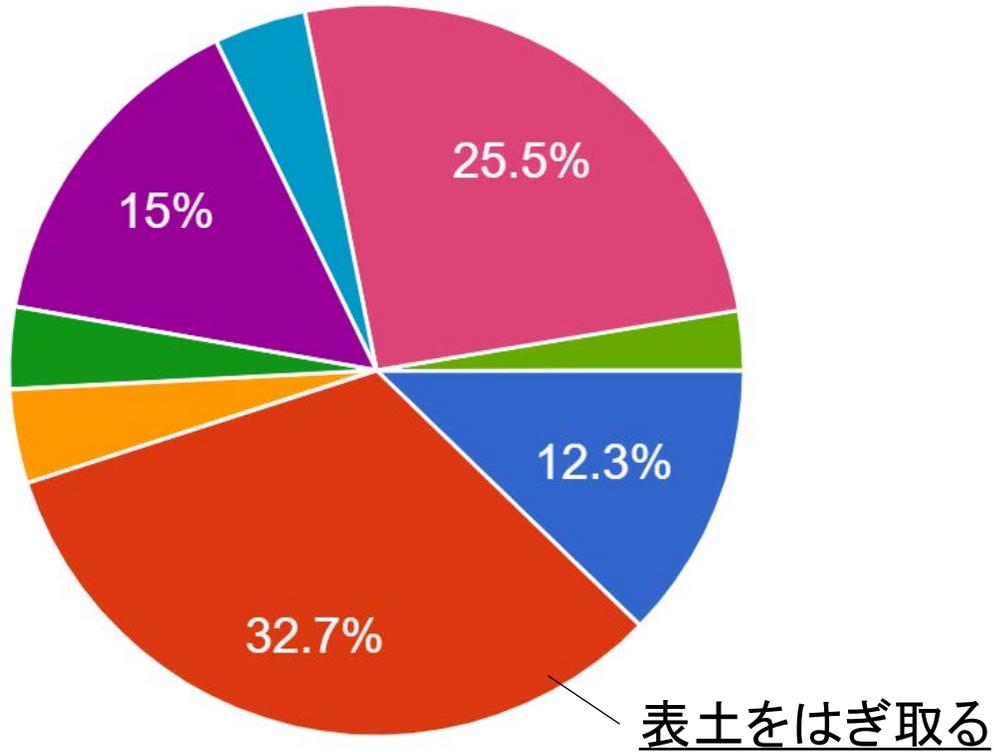


図2: 除染作業の認知度

- 除染剤を散布する
- 表土を剥ぎ取る
- 溶加材を噴霧する
- 放射性物質を燃やす
- 放射線物質定着効果のある土砂を盛土する
- 高線量エリアにサーキュレーターを設置する
- 時間が経つのを待つ
- 上記のいずれでもない

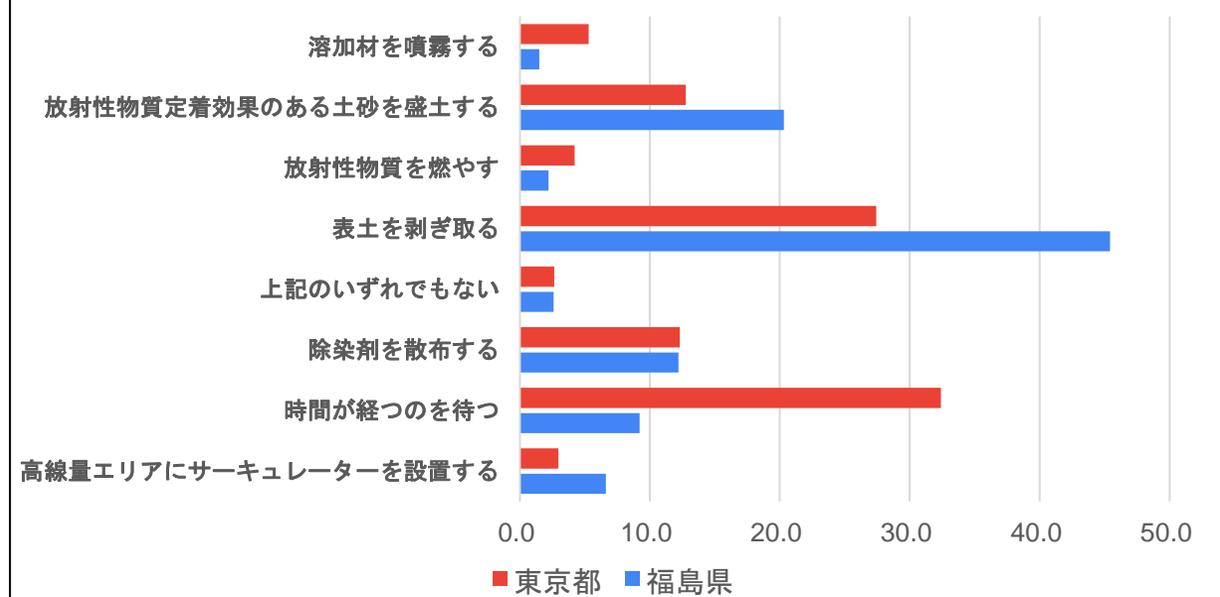


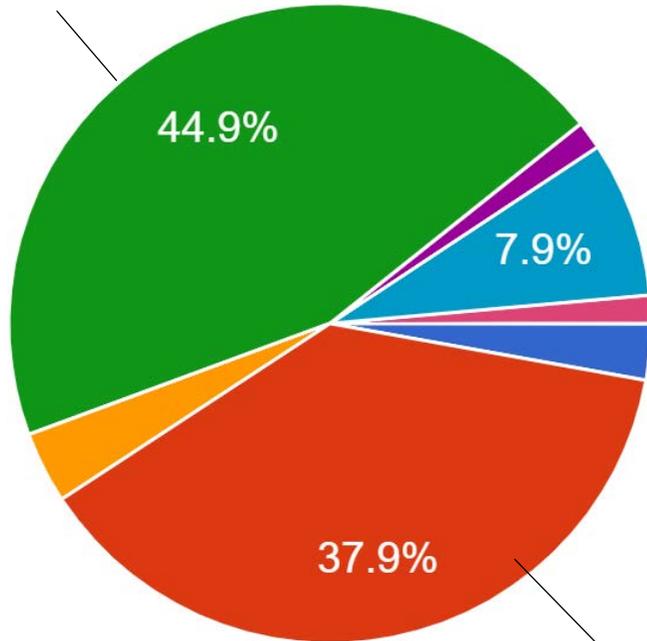
図3: 除染作業に関する地域別の認知度

東京圏では「時間が経つのを待つ」(32.4%)が最も多く、福島県でも「放射線物質定着効果のある土砂を盛土する」(20.3%)などといった**誤回答が一定数みられ、県内外で除染作業についての認知が低い現状が明らかとなった。**
→ **議論の前提となる基礎知識の不足**

原発事故“メルトダウン”の認知度 約四割弱

福島第一原発事故のメカニズムについて聞いたところ、正答である「原子炉が冷却できなくなり、燃料が溶け落ちた」と答えたのは、**全体の約4割(37.9%)**だった(図5)。また、福島県と東京圏で正答率を比較したところ、**福島県の正答率は28.0%、東京圏の正答率は42.1%**で、**東京圏の正答率が福島県を大幅に上回る結果となった。**(図6)

原子炉が冷却できなくなり、燃料が爆発した



原子炉が冷却できなくなり、燃料が溶け落ちた

図5: 原発事故のメカニズムについての認知

- 原子炉が加熱できなくなり、燃料が溶け落ちた
- 原子炉が冷却できなくなり、燃料が溶け落ちた
- 原子炉が加熱できなくなり、燃料が爆発した
- 原子炉が冷却できなくなり、燃料が爆発した
- 原子炉が過熱できなくなり、原子炉建屋が炎上した
- 原子炉が冷却できなくなり、原子炉建屋が炎上した
- 上記のいずれでもない

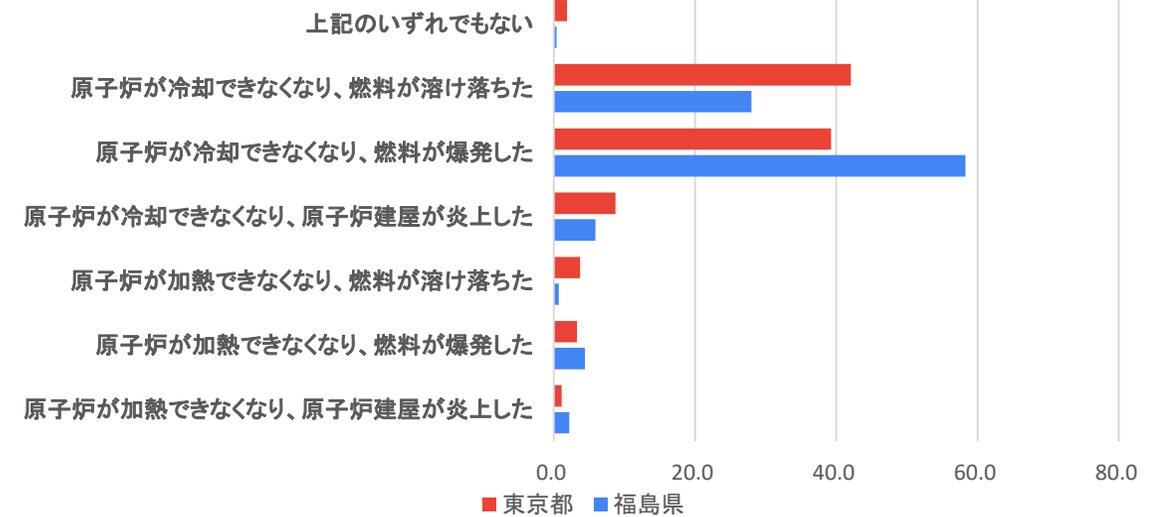


図6: 原発事故のメカニズムに関する地域別の認知度

福島県内の回答として最も多かったのは、誤った選択肢である「原子炉が冷却できなくなり、燃料が爆発した」(58.3%)であり、原発事故のメカニズムに関して、福島県内で誤った認知が定着してしまっている可能性が示唆された。

→ **どのような情報をどうやって伝えるのか、災害伝承の在り方の再考が必要**

提案

① 次世代だけでなく、その周囲の認識も高めていくべき

◎高校生は、周囲の考えに影響を受けている

福島県内の食・旅行について、自身の忌避の有無を聞いた設問と周囲の忌避者の有無を聞いた設問についてクロス集計及び χ^2 検定を行ったところ、1%水準で有意差が認められた。表2、表3の結果からは、**福島県産の食品を食べることや県内での旅行を躊躇する人は、周囲にもそれらを躊躇する人がいることが確認された。**

表2 「福島県産の食品を食べることへの躊躇の有無」×「周囲の県産食品への忌避者の有無」

	躊躇する	躊躇しない	合計
周りこいる	68 26.3	191 73.7	259 100
周りこいない	7 1.1	647 98.9	654 100

上段:実数 下段:パーセント $p<0.01$

表3 「福島訪問についてのためらいの有無」×「周囲の福島訪問への忌避者の有無」のクロス集計

	躊躇する	躊躇しない	福島在住	合計
周りこいる	34 18.2	148 78.1	7 3.7	187 100
周りこいない	15 2.1	693 95.9	15 2.1	723 100

上段:実数 下段:パーセント $p<0.01$

② 従来型メディアとの連携

◎高校生の約7割が、「テレビ」から除去土壌最終処分を知ったと回答

除去土壌の県外最終処分を知っていた人に知ったきっかけを聞いたところ、**約7割が「テレビ」、4割が「学校」と答えた。**「新聞」、「SNS」はどちらも2割弱であった。このことから、学校教育やSNS等での情報発信も非常に重要ではあるが、**テレビなどの従来型メディアとの連携も重要である**ことが示された。一方で、テレビなどの映像媒体は、情報伝達の過程で何らかの誤解を生んでしまう可能性もあるため、それらを考慮したうえで報道の内容や構成を考える必要がある。

③教育活動による高校生の認知の改善

◎福島県内外ともに、認知を高める必要性

次世代の認知を高めるためには、**正確な知識を継続して伝えていく**ことが必要であり、その最たる手法が教育である。そして、教育によって得た知識を用いて**自身で行動できる**よう促すこと。これが最も重要である。

そこで、以下の取り組みを提案する。

1. 教育機関へ向けた積極的な広報活動の実施

→「いま福島を学ぶことの意義」をまずは**教育機関に知ってもらう**ことが重要。それと同時に、環境省が行っている出前授業や現地視察ツアーなどの取り組みについても広報を行っていく。

2. 双方向の対話型教育の推進

→福島県と東京圏の生徒では、それぞれがもつ知識・認識に違いがあると推察される。除去土壌の県外最終処分、再生利用等について、**各々の視点を共有し、意見を交える**ことが、除去土壌問題解決への第一歩と考える。

3. 福島を題材とした探究活動の推進

→福島県内には、文理を問わず様々な課題が存在する。そこで、福島を題材とした探究活動を行うプログラムを実施し、**根本から福島について知ってもらう**。また、それらを発表する機会も設ける。

次世代の認知を高めること。それは、福島の未来を紡ぐことである。

次世代の、震災・原発事故や除去土壌についての認知が低いという現状を踏まえ、さらなる対応を行っていく必要がある。